

早稲田大学大学院社会科学研究科

博士学位申請論文審査要旨

学位名称	博士（社会科学）
申請者氏名	関口 直佑
論文題目	会沢正志斎の研究 A Study of AIZAWA Seishisai

博士（社会科学）学位申請論文審査要旨

関口直佑
会沢正志斎の研究

[1] 主題と概要

本論文は後期水戸学を代表する会沢正志斎の思想を明らかにしようとしたものである。会沢については、これまでも数多くの研究がなされてきたが、その大半は『新論』を中心にした国体論、政治論であった。これに対して本論文の執筆者は、そうした従来の研究にいささか違和感を覚え、『新論』の根底にある会沢のより深い思想から、改めて会沢の真の思想に迫ろうと試みる。それは具体的には、会沢の思想の源流を明らかにすること、『論語』をはじめとする儒教経典に対する会沢の解釈の検討、更に国学者・本居宣長の主要著作についての会沢の議論、を通してなされる。

また執筆者は、会沢の思想が明治以降、殆ど継承されなかったという従来の研究にも疑問を抱き、その修正を迫る。具体的には、岩倉具視や長谷川昭道、元田永孚の思想、特に教育論を検討する。そして、本論文はそうした試みを、会沢に見られる「考証学」の影響と、『周礼』の重視に注目し、それらを軸として一貫した議論を行っている。前者については、大田錦城→藤田幽谷→会沢正志斎→長谷川昭道という系譜で、後者については、大田錦城→会沢正志斎→長谷川昭道→元田永孚という系譜で、それぞれ議論しているが、何れもこれまで殆ど解明されてこなかった系譜である。

本論文は、三部から構成されている。第一部「会沢の思想形成期」では、先ず、会沢思想の源流を問い、会沢の師である藤田幽谷の学問の特徴と幽谷と大田錦城との関係、また徂徠学と崎門学の何れが会沢の思想により大きな影響を与えたかを究明する。次に、『新論』以前の会沢の国際理解の経過とその国際観を考察し、会沢が世界に目を向けるようになる背景を水戸藩の学問的土壌から説き、更に幽谷の国際性と錦城の国際論について論じ、最後に『諳夷問答』を中心に会沢の国際観を探る。

第二部「会沢の思想発展期」では、先ず会沢の儒教経典、即ち『中庸』、『孝経』、『論語』、『書経』、『易経』、『周礼』に対する分析を解説、それらが会沢の思想にいかなる影響を与えたかを考察する。次に会沢の教育思想の淵源とその特徴を扱うが、そのためにその背景にある水戸藩の教育振興策や弘道館設立の経緯を述べ、幽谷の教育論を会沢のそれとの比較に及ぶ。そうして、会沢の教育思想の根底にある思想について論じるが、ここでは特に、『周礼』の教育観が会沢に大きな影響を与えていることを論証する。更に、会沢の思想

と国学の関係を取り上げ、塙保己一や幽谷、吉田令世などの国学観を追いながら水戸藩と国学との関係を明らかにし、会沢の国儒論争について書いた四部作、『読直毘霊』、『読葛花』、『読級戸風』、『読万我能比礼』、を解説することによって、会沢と国学の関係を解明する。最後に、国儒論争の争点に「道」について、会沢独自の視点を検討する。

第三部「会沢の思想展開期」では、岩倉具視や長谷川昭道を取り上げ、会沢の思想が明治以後継承されることがなかったという議論に反論する。先ず岩倉と会沢との思想関係を論じ、次に会沢の思想の影響を受けた長谷川の教育論に注目し、岩倉と長谷川との関係を扱い、長谷川と大田錦城の关系到及ぶ。更に岩倉の道徳思想とその変遷を考察する。次いで青年期に水戸学、特に会沢の影響を受けた元田永孚に焦点を当て、元田も会沢と同じく『周礼』を重視していたこと、また「孝」について両者の理解は通底していたことを確認し、更に元田関わった「教育勅語」と「孝」との関係について考察する。

以上のように本論文は、数多くの先行研究に学びながら、会沢正志斎の思想でなお未解明の部分、疑義が残されている箇所を、独自の視点から解明・再検討しようと試みたものである。

[2] 論文の構成

本論文は、A4版で500頁を超えるもので、構成は以下の通りである。

目次

序章 会沢正志斎研究史と本書の構成

第一節 会沢正志斎研究の概要と課題

第二節 本書の構成と研究手法

第一部 会沢正志斎の思想形成期

第一章 会沢正志斎の学問とその系譜

はじめに

第一節 藤田幽谷の学問

第二節 藤田幽谷と大田錦城

第三節 会沢における徂徠学と崎門学

第四節 会沢と喪礼

おわりに

第二章 会沢正志斎の国際性

はじめに

第一節 水戸藩の開明性

第二節 藤田幽谷の国際論

第三節 『諳夷問答』と国際観

おわりに

第二部 会沢正志斎の思想発展期

第三章 会沢正志斎と儒教

はじめに

第一節 会沢と『中庸』

第二節 会沢と『孝経』

第三節 会沢と『論語』

第四節 会沢と『書経』

第五節 会沢と『易経』

第六節 会沢と『周礼』

おわりに

第四章 会沢正志斎の教育思想

はじめに

第一節 水戸藩の学風

第二節 藤田東湖の教育思想

第三節 弘道館の教育課題

第四節 学制と『周礼』

第五節 教育論とその拡大

おわりに

第五章 会沢正志斎と国学

はじめに

第一節 水戸学と国学

第二節 会沢と国儒論争

第三節 会沢の「道」とその実践

おわりに

第三部 会沢正志斎の思想展開期

第六章 会沢正志斎と岩倉具視

はじめに

第一節 岩倉具視の対外意識

第二節 岩倉具視の教育顧問

第三節 長谷川昭道の皇学理念

第四節 長谷川昭道と大田錦城

第五節 岩倉具視の道德思想

おわりに

第七章 会沢正志斎と元田永孚

はじめに

第一節 元田永孚の思想研究史

第二節 憲政意見と国体観

第三節 元田永孚と『周礼』

第四節 神器と論語

第五節 元田永孚と「孝」

第六節 教育勅語と「孝」

おわりに

終章 会沢正志齋の社会科学

第一節 本研究の総括

第二節 会沢正志齋の社会科学

参考史料

「正志齋先生略譜」

会沢正志齋著作一覧

[3] 各章の概要

序章

会沢正志齋に関する主要な先行研究を取り上げ、各研究の要点を纏め、取るべき点、疑問点を指摘し、以下の議論に繋げている。主な先行研究としては、J・ヴィクター・コシュマン『水戸イデオロギー』、遠山茂樹「水戸学の性格」、丸山真男『日本政治思想史研究』、山口宗之『改訂増補 幕末政治思想史研究』、上山春平『明治維新の分析視点』、尾藤正英「水戸学の特質」、今井宇三郎「水戸学における儒教の受容」、安丸良夫「歴史における民族の形成」、吉田俊純『後期水戸学研究序説― 明治維新史の再検討』、辻本雅史『近世教育思想史の研究』等が取り上げられている。

第一部

第一章

はじめに 会沢の思想形成を、「学統」に着目することで、つまり師であった藤田幽谷の思想との系譜的な繋がりから捉える。言い換えれば「会沢へと継承されたであろう思想」と「会沢により新たに解釈が加えられた可能性」とを明らかにする

第一節 ①後期水戸学に至る水戸藩の学統が、かなり多様な水脈から成る。②後期水戸学の「国体論」の実質的な源は幽谷としてよいが、幽谷の語法としては（安積澹泊らとの連続性が強く）旧来の用法を脱していない。③幽谷は、徂徠学については、荀子に由来するもので、古文辞学派からする古典解釈は恣意的であり、道徳を軽視する傾向が強いとして、否定的である。幽谷の思想は（闇齋学からというより）栗山潜鋒の「正名」論的な歴史観に大きく影響され

ている。

第二節 ①幽谷の学問には考証学的な面があり、大田錦城との交流が注目される。錦城は、若い時に徂徠学に傾倒したものの、その後、徂徠学には否定的となった（荀子・功利主義・反道徳的人格など）。②幽谷にも会沢にも「四端の拡充」説をはじめ、仁斎学からの影響が認められる。

第三節 ①徂徠学には「勤皇」や「国体」の思想がないし、幽谷からの徂徠学への否定的な評価は、会沢においても継承された。②「神器」論から「皇統守護」論まで、また「孝」に基盤を置いた歴史認識・国家意識においても、闇齋学（垂加神道）との共通性が顕著である。

第四節 ①喪礼への着目は幽谷から継承されたもので、それが「孝」の思想に媒介されて「国体論」と結合されている。②喪礼の議論から、会沢の死生観を見ることができる。③愚民論とされてきたものも、民衆への啓蒙、強兵育成のための教化として理解することができる。

第二章

会沢の国際理解は、鎖国という限定された状況下でありながらも、同時代の水準からみて極めて高いものであったことを明らかにしている。

第一節 ①水戸藩は古くから海外へ目を向けていたが、会沢が幽谷門下となって間もなく、ラックスマンが根室に来航、会沢もロシア関連資料を調査して『千島異聞』を纏めた。②立原翠軒の命により北方の探索へと乗り出した木村謙次は、諸外国は「互市」を起点とし、そこから状況に合わせて武力や「妖教」などの手段によって占拠したりすることもあるとしているが、会沢の『新論』にも同様の記述があり、会沢が木村から影響を受けていることは明らかである。

第二節 ①藤田幽谷はラックスマンの根室来航を契機として国防意識を強く持つようになり、文政6年、「癸未封事」を進言、異国船は決して捕鯨だけが目的ではなく、兵站確保を目的としていると訴えた。②文政7年、イギリス人が大津浜へ無断上陸、また薩摩藩領宝島への上陸事件が発生、幽谷の懸念は現実のものとなり、幕府も遂に無二念異国船打払令を発した。③幽谷は大田錦城、木村謙次、近藤重蔵らの影響も受けつつ、単に夷狄を排除するだけでなく、国内の政治的統一と民心の安定を図らなければならないと感じ、会沢もまた、幽谷のこうした考えの影響を受けた。

第三節 ①会沢はイギリス人大津浜上陸事件の際に筆談役として参与し、その時の記録を『諳夷問答』として纏めた。②会沢は日本には武士階級が存在するから、西洋諸国は武力で我が国を占領するのではなく、宗教によって人心を掌握するだろうと推測し、その対抗策として『新論』の国体論が案出された。会沢が軍事力よりも国体論を重視したのは、西洋には宗教があることを知り、民族の紐帯こそが自国を守る要だと考えたからである。③会沢死去の前年に記

された「時務策」では、国際情勢の変化に着目することを提言し、日本も「和親通好」すべきだと提言している。

第二部

第三章

はじめに 大きな問題意識として、「和魂漢才の下地が洋才への転換を容易にさせた」という平川祐弘の議論への共感が表明される。

第一節 ①会沢の『中庸』解釈は、伊藤仁斎の「道」や「徳」の理解を踏まえている。②会沢の祭祀論については、今井宇三郎の会沢解釈に従っている。

第二節 ①会沢の「孝」には、生命の永遠性、死後の安心という要素がある(加地伸行の議論を援用)。②忠誠心・神話・歴史的記憶(忠臣の活躍)が、「孝」を中核として相互に結合して、民族的な紐帯を作っている。③「孝」の観点から、民心統合における皇室祭祀の意義が説かれている。

第三節 仁斎『論語古義』と大田錦城『論語大疏』に拠ることが多い。

第四節 ①「天」に関する考察は、先行研究(今井宇三郎)に譲る。②会沢は堯や周公などの政治に、歴代天皇や幕府のそれとの共通性を窺いながらも、「皇統一姓」という日本の固有性を手放さない。

第五節 ①易学と歴史認識が結合している。具体的には、易の理論に拠って宋代の政治史を説明し、その中から教訓を得ている。②帝王教育を論じながら、幕府政治をそこに重ねている。

第六節 ①会沢の『周礼』への関心は、幽谷からの影響が強い。②官制・地誌編纂・帝王論などをめぐって、幕末から維新期を通じて、『周礼』の影響が大きいという羽賀祥二の主張を支持する。③周の王権と幕府は、封建制という点で重なり、その国家体制論も幕府を念頭に理解されている。④大嘗祭の理解では、必ずしも儒教の祭祀論(郊社・禘嘗の論)に従うのではなく、日本の固有性を基盤に据えている。

第四章

第一節 水戸藩の教育改革は、天保の改革を契機として行われ、藩主徳川斉昭は人材登用、奢侈風俗の矯正、藩校弘道館の教育改革に注意し、『孝経』聖治章をモデルにして、弘道館に建御雷神(鹿島神)と孔子廟を併置した。

第二節 藤田東湖は藩校弘道館を神儒一致の学校とすることに同意し、会沢と同じく『周礼』に倣って「徳行道芸」の教育制度を計画した。

第三節 天保12年に開設された弘道館の名は、一世を風靡し多くの藩の教育に影響を与えたりしたが、しかし偏文偏武、恩賞偏向、漢書偏重、治教不一致、諸生遊惰などの問題があり、会沢などはこれらの問題克服に『周礼』を拠り所として解決策を探った。

第四節 ①会沢は『学制略説』を著して、『周礼』の学校制度を「総論」、

「門闈之学」、「次舍之学」、「郷学」、「大学」の五部に纏め、封建制における望ましい学校制度を希求する。②『周礼』の学制を採用することによって、封建制における世禄の人の賢才欠如を防ぎ、来るべき時代に対応可能な人材育成が図られるとしている。③会沢は日本を取り巻く世界情勢を学び、それを国益へと還元できる人材の養成を目指していた。

第五節 ①会沢の学問の集大成とも言える著作『下学邇言』は、自らの学問観を体系的に論じたもので、「治教一致」という理念によって構成された実践的学問体系が展開されている。②会沢は後天的な習慣や教養によって善悪賢愚の隔たりが生じるから、徳育、実学の重要性を強調して、人間の心性を重んじる「宋学」には反対する。③会沢は、洋学の利点については容認しつつも、洋学に「聖經」の要素が認められない点には批判的であった。

第五章

第一節 ①儒学者の太宰春台は、我が国には儒教伝来以前には「道」は存在せず、「道」は聖人の「道」の中にあると主張したのに対して、本居宣長などの国学者は反論し、『古事記』の中の「古言」を明らかにすれば、我が国の「古道」を自ずと解明できると反論した。②会沢は「道」とは天下の大道で、普遍的なものであると考えていたが、国学者と儒学者との論争に関心を示し、寧ろ国学者に共感を覚えた。③聖人の道を擁護しようとした会沢に対して、藤田東湖は我が国体の尊厳性を重んじて異を唱えた。

第二節 ①会沢は、宣長の議論を卓見であるとしつつも、宣長が聖人の「道」を誇るのには、偏見陋説で、四海万国には通用しないと批判した。②会沢は、皇国に「道」なしとする儒者も批判し、人倫は自然の大道で、四海万国どこにも存在すると主張する。③会沢は、国儒何れの立場にも与していなかった。

第三節 ①本居宣長は、学問と政治の区別を主張したが、会沢は「道」とは「実用」性のある実践的なもので、それゆえ政治的なものであった。②会沢は当時の国際情勢を観察し、民心の統合が急務と考え、洋学の流入による思想界の混乱を禦ぐために、国儒のみならずあらゆる学派を統一することが必要であると考えた。③会沢が晩年に国儒論争に参戦したことは、「民心統合」という目的のための付随行為であり、机上のみで終始することのない水戸学者・会沢正志斎の最後の実践行動であった。

第三部

第六章

第一節 岩倉具視は、安政の通商条約の締結や貿易港の設置は、欧米諸国による富の篡奪手段と認識していたが、問題がキリスト教対策となると、国体意識を強固に持つようになり、会沢の『新論』の考えと軌を一にするようになる。

第二節 岩倉の周りには、当初平田派神道の国学者が多数集まったが、京都

の皇学所で、皇学派と漢学派とが対立して頓挫した後は、松代藩士で水戸学の影響を受けた長谷川昭道が彼らに代わって岩倉に建策をするようになった。

第三節 ①長谷川は在藩時代から会沢や藤田東湖の強い影響を受け『皇道述義』を著した。②長谷川が主唱した皇学は「実用」性を主眼としたもので、岩倉は長谷川の意見を参考にして政府に時務策を進言した。③長谷川のいう「皇道の大道」とは「彝倫」であり、学問は洋の東西に関わらず「彝倫」の究明が第一の眼目で、それは会沢のいう「天下の大道」とほぼ同義である。④長谷川は会沢と同じく『孝経』を基盤とした「孝」観を主張したが、「孝」よりも「忠」を上位概念とした。⑤長谷川が「忠」を重要視したのは、家族的「孝」を超越した国民の一体感を強調し、「万物」をも視野に入れた普遍的な道德心の陶冶を目指したからである。

第四節 長谷川は大田錦城の『九経談』を評した『九経談総論評説』を著し、大田がよく漢籍に通じ、その議論も公平であると評価する一方、大田の学問は儒教の真理に通じていないと批判している。例えば大田が「徳」の存在を重視して堯舜の禅譲放伐を容認したのに対して、長谷川は、禅譲放伐は人道に反するとしている。

第五節 ①岩倉は幕末のペリー来航以降、「実用」の学を強調するようになり、社会の実用に適する人材育成の必要性を訴えた。②明治維新後も岩倉は、長谷川の建策を下敷きとして、「彝倫の道」を最重要視する教育理念を主張している。

第七章

本章は、憲政と教育に関する分野に焦点を絞り、元田の思想を検討し、元田に対する水戸学の影響を整理する。また元田研究の新たな視点として『周礼』との関係性を提示する。また元田の「君徳輔導」概念を検討し、その根底にある「神器」と「論語」についての会沢の影響を論じる。そして最後に、元田の「孝」の概念について分析し、それがいかに教育勅語に敷衍されていったかを究明するとしている。

第一節 冒頭で、元田の思想への水戸学の影響について、影響があるとする説と希薄とする説とを紹介した上で、幕末期の元田に関する史料をもとに、元田が深く会沢に敬服していた様子を示し、会沢の思想が元田に継承された面もあるに違いないとする。

第二節 元田の憲政意見と国体観を検討する。元田は西洋の憲政とは異なる「推古帝の憲法」を拡充した憲政を実施し、国体の維持を主張したとし、大木喬任、金子堅太郎、穂積八束らの意見との類似性を指摘する。

第三節 元田の政体構想ならびに教育論に『周礼』からの影響が強いことを論証している。

第四節 儒学思想と国体との関係について、特に「神器」と「論語」を焦点に論じ、会沢の思想との共通点を指摘する。

第五節 元田の「孝」の観念に関する理解を検討することで、その道德思想と君臣関係の理解との関係を明らかにする。「孝」の観念の根源となる生命の連続性の延長線上において、君臣関係の継続性も強調されていることが指摘される。

第六節 教育勅語における「孝」の思想を検討し、そこに祖先祭祀の思想が見られること、勅語起草者の一人である井上毅の祭政一致論において『新論』の影響が見られることを指摘し、教育勅語における会沢の影響を論じている。

終章

第一節では、本論文の内容が簡潔に纏められている。第二節では、会沢の思想に社会科学的側面が多く含まれていること、また執筆者自身の今後の課題について記されている。

[4] 各章の分析と評価

序章

会沢正志斎に関する先行研究を殆ど取り上げていることは評価できるが、概ね研究者個人の先行研究について論評していて、時代別、テーマ別に整理した方がより説得的になったのではないか。

第一部

第一章

①会沢の育った思想的な環境、具体的には藤田幽谷との繋がりについて、①闇斎学派と括らずに、栗山潜鋒の「正名」論的な歴史観の影響を指摘したこと、②幽谷から会沢の流れの中に、大田錦城を位置づけたこと、③喪礼の意義が、国家論や歴史意識にまで結合していて重要であること、これらを指摘したことは成果である。また、水戸学のスローガンである「忠孝一致」の理解を、「孝」の側から深める道を開いたと評価することができる。④後期水戸学と徂徠学の連続性を指摘して、研究史上の大きな論点を提出したのは尾藤正英「水戸学の特質」であり、本論はこれを批判している。そうであれば、もう少し丁寧に、先ず尾藤の論旨を紹介して、その上で論を展開すべきかと思う。私見では、尾藤の着眼は、思考の型ともいうべき次元での両者の連続性にあるのであり、執筆者の議論とはズレているのではないか。⑤私見では、後期水戸学では、朱子学や陽明学が力を注いだ「心性」論が徹底して忌避されている。一人ひとりが自己の心をどうコントロールしていくのかという発想が斥けられ、祭祀や儀礼、制度の力で、風俗としてそれをどう導くのかという統治論的な発想が強烈である(これが、徂徠によって提出された問題だという尾藤の理解は、その限りで正

当だといえる)。伊藤仁斎の道德論が導入されるのも、「心性」論の忌避という文脈からのことであろう。このあたりへの目配りが不足している。④本論は、水戸学において、崎門学派（垂加神道）が丸ごと受容されたという趣旨ではないだろう。とすれば、どこが排除されて、どこが受容されたのかを腑分けする必要があるのではないか。それはまた、幽谷からの継承についても、同じことがいえる。

第二章

①「会沢正志斎の国際性」と題する本章は、対外認識の視点から従来の会沢評価に疑問を呈し、新たな会沢像を提示したものである。従来の会沢像は、自国のみを「神国」とし、「夷狄」の排除を目的とした排他的人物、というものであった。本章では、会沢が強く影響を受けた木村謙次と藤田幽谷の対外認識を詳細に検討し、両者との比較を通して、会沢の「国際性」を浮き彫りにするという手法をとったことは評価できる。②本章では、水戸藩では徳川光圀以来、ロシアをはじめとする外国の動向に注意を払って情報収集を行ったことを詳細に述べ、会沢も外国の国際戦略に細心の注意を払っていたことを指摘している。そして、「国体論者」という従来のイメージを払拭して、会沢は西洋の海軍力の精強さを論じたが、自国の軍備増強を強く主張しなかったこと、兵器や兵法について造詣が深かったにも拘わらず、安全保障の方法論として、軍事力よりも、「精神的側面」を講じたことを強調した点は極めて興味深い。執筆者は、当時の国際情勢は海上覇権による「戦国の世」であったにも拘わらず、国の安全を守るものは、「民族としての紐帯」という精神的な要素を強調した会沢の国際性を強調したのである。③興味深いことは、木村謙次と大田錦城、近藤重蔵との関係にも触れ、特に大田の「明清革命論」と後期水戸学との関係も言及しており、議論の幅を大きく広げたことである。④ただ、前半の2節では、木村謙次と藤田幽谷の国際性を中心に述べたが、会沢が二人の影響を受けた直接的な史料を多く示すことが出来なかったことはやはり残念である。会沢の国際感覚を理解するための必要な作業として、今後の研鑽を期待したい。

第二部

第三章

①会沢が儒教の古典について本格的な研究者であることは知られているが、その内容に立ち入って分析する作業は、今井宇三郎の先駆的な仕事を除いて殆どなされていない。今井の仕事も、漢学的な枠組みからのもので、特に会沢の『周礼』や『孝経』解釈についての、思想史的な立場からの解明が待たれていた。本論は祭祀をキーワードにして（このキーワードの設定は極めて適切である）その解明を試みたものであり、行論の全体を通じて、民心統合という観点からの、藤田幽谷から継承された会沢の祭祀問題への関心の深さと、皇室祭祀

の固有の意義への着目という論点が浮き彫りにされた。今後のこの分野の研究の礎石たるべき貴重な成果であろう。②祭祀を論じるのであれば、「天」をどう理解していたのかという問題を避けるわけにはいかない。天皇の「天」とは何か、天皇は「祭天」の儀礼を行なうのか、かつて「祭天」儀礼を行なった天皇をどう評価するのか、などという問題が付随する。これを正面から論じていないのは、物足りない。②加地伸行の「孝」論に依拠して議論が進められているが、「孝」が「自然な親子愛」で「東北アジアの（中略）死生観」云々というように簡単にいえるものか。「孝」のイデオロギー性が全く論じられていない。③伊藤仁斎の『中庸』解釈には、会沢とは全く方向の違った部分もあり、どこを受容しどこを拒否したのか、それは何故なのかが論じられていない。④大嘗祭についての論述は錯綜していて理解し難い。

第四章

①これまでの会沢研究は、『新論』の分析や「国体論」を中心とした政治論が多かったが、本論文では会沢の教育論を真正面から取り上げ論じていて評価できる。藩校弘道館は、国際人養成のための教育機関として位置づけることも可能としているが、そこまで言えるのか。そのように論じている研究者はいるのか。②「弘道館記」に関しては、会沢に『退食間話』、東湖に『弘道館記述義』という解説書があり、本論文は両書の教育論を細かく比較し、両者の思想一特に「道」について一の違いを論じていて評価できる。「弘道館記」の最後の「学問事業。不殊其効。」について、本論文では会沢の解釈は詳しく論じられているが、東湖は取り上げられていない。会沢の概念としての学問の領域は東湖のそれよりかなり広いように思われる。会沢の学問には「礼楽教化」だけでなく「法度制令」も含まれているのではないか。しかし、その「法度制令」の中に、法家の思想は入っているのか、明らかでないようである。③東湖は「封事」随筆類は残しているが経書研究がない点で、会沢と異なるという指摘は極めて重要である。④会沢が教育論を第三章で扱った『周礼』の研究書『読周官』と比較し、同著が考証学的手法で論述されたものであることから、会沢の教育論が会沢なりの教育論における普遍的な「道」を求めんとする一端を見せているという議論は正鵠を射ている。会沢が『周礼』を重視していたことはよく分かるが、大田錦城（また第六章で取り上げられている長谷川昭道も）は、『周礼』に対してはネガティブだった。会沢は『論語』の解釈等は、大田から学ぶところもあったが、『周礼』についてはそうでなかったということだろうが、その理由は何だったのか。会沢の教育論の先駆とされる「対問三策」の分析が詳しく的確で評価できる。会沢が教育政策を論じた『学制略説』が『周礼』に依拠しつつも、そこには会沢独自の教育論とその応用としての制度論を見出していて、その緻密な分析は評価できる。会沢は教育を『周礼』に見られる「道

芸」という視点で論じていて、これは維新後、例えば江藤新平が道学と芸学とに分け、近代的学制を構想したことに繋がっているとの指摘は面白い。しかし江藤の場合、芸学によりウェイトが置かれていたのでは。⑤会沢の洋学観についてもっと詳しい議論が欲しかった。科学史家の中山茂は会沢の洋学観を「無益論」としていて、これもどうかと思うが、会沢もやはり新井白石以来の「形而下」のものと理解していたのか。会沢は『退食間話』の中で、長崎通詞による洋書の翻訳について言及して、「世の害ともならず」と述べているが、それについて会沢はどの程度知っていたのか。例えば、志筑忠雄の『暦象新書』は知っていたか。また朱子学者は洋学、特に自然科学（の方法）を「窮理」という用語で理解していたが、会沢は洋学者を「窮理と称して、・・・空理を穿鑿し、・・・天地に陰陽動静の活意ある事を知らず」と言っているが、会沢は「窮理」や朱子学と洋学の関係についてどう考えていたか。⑥長谷川の皇学の根底にあって、普遍性を持つとされる「彝倫」に関する議論が短くて余り説得力がない。特にその鍵を握ると思われる「伸張性」についてもっと詳しく論じてほしかった。また、「彝倫」がどこに由来しているのかも。⑦易姓革命をめぐる議論を通して、大田、会沢、長谷川らの思想的違いが明確にされていて評価される。⑧『孝経』の孝を思想の基底にしている点で、また祭祀観において、会沢と長谷川は思想的に近い、という指摘はよく理解できる。

第五章

①水戸藩内外の儒学者たちの国学論を取り上げ、近年の研究を踏まえながら、それらを整理していて評価できる。②会沢の本居宣長の国学に対する議論は、宣長の『古事記伝』ではなく、その結論部分（『直毘靈』）に依拠してなされており、また執筆者もそうした会沢の手続きに依って論じているがそれでいいか。③宇野精一の議論に拠りつつ、会沢の「道」を解明し、それは普遍的なものだが、また実用的、実践的なものとし、混迷する当時代にあつて、「あらゆる学派を統一することで、いわば形而上における安全保障体制の構築を試みるものであった」とし、執筆者はその推論を従来余り着目されなかった『閑聖漫録』を取り上げ補強していて評価できる。④会沢が一段高い立場から国儒論争を眺め、双方の統合を考えていたと指摘するけれども、その態度は、後に長谷川昭道が提唱した「皇学」に相当するような印象を受けるが、会沢自身は、自分のそのような立場をどのように位置付けていたのか、気になるところである。⑤明治初期、次章でも取り上げられている京都と東京の大学校における儒学者と国学者の争いが決着しなかったことは、会沢の議論も不十分であったことを露呈しているともいえるのではないか。⑥本章の行論に無理はなく、堅実な手順で、新規に異議を見出す提起を行っている。また先行研究と一次資料の捕捉はほぼ十分のようだが、それらの参照に関しては、抜き書き的な部分があるよ

うにも感じられるので、趣旨全体の踏まえを感じさせるように記述すると更に良くなったであろう。

第三部

第六章

①岩倉研究の資料として、『岩倉公実記』、『岩倉具視関係文書』の他、近年マイクロ化された資料も使っていて評価できる。（尚、最近かなりの量の岩倉書簡が発見されたそうである）②これまで殆ど取り上げられてこなかった長谷川昭道の思想を水戸学や岩倉具視との比較を通じて論じている点で評価できる。③従来、長谷川昭道は佐久間象山の政・論敵として僅かに論じられてきただけだったが、その点については、本論文では殆ど言及されていない。長谷川は佐久間から洋学を習ったともいわれている。当時の日本一恐らく松代藩でもそうだったと思うが一の主流は佐久間のような思想だったので、佐久間との違いにも少し言及してもよかったのではないか。④長谷川は「立憲政体」についても議論しているが、本論文では言及されていない。第七章との関連でいえば、長谷川は元田永孚の立憲政体論に近かったのではないか。⑤本論文は、京都の大学校での国学派と漢学派との対立について論じているが、東京の大学校でも同様なことが起こっている。東京の大学校での対立にも少し言及があってもよかったのでは。対立の理由は同じであったと理解してよいのか。⑥長谷川は熊沢蕃山の影響を受けたとされるが、藤田幽谷も蕃山に親しんでいたといわれるし、会沢にも蕃山への言及もある。その辺りについても少し論じてよかったのでは。

第七章

①先行研究として沼田哲の研究には触れられているものの、憲政に関する研究としては、荻部直、池田勇太によるものがあるのに、触れられていないのは何故か。本章はそもそも元田研究なのか、それとも元田への会沢の影響を探るものなのか、二つの論点が混合しており、章全体の目的が奈辺に在るのかが不分明である。結果として、「おわりに」を読んでも、個別の新しい事実の指摘こそあれ、先行研究に比してどのような元田像を打ち出し得たのかは明確ではないし、また会沢との類似性は指摘していても、会沢からの影響関係をしっかりと論証したとはいえないような印象を受ける。もともと元田研究として書いた論文に、無理に会沢との関係を接続している印象を受ける。②第一節で、会沢への元田の敬意を示す資料を提示して思想の影響関係を指摘しているが、先行研究において元田への水戸学の影響を希薄としているのは、明治期における話であり、幕末期の史料で影響を証明するだけでは不十分ではないか（幕末期に一旦影響を受け、その後それを脱却した可能性が排除できない）。無論、明治以降についても二節以降で、思想の類似点を指摘しているが、類似しているこ

と、思想の影響関係があるということとは別である。同時期において会沢と同じような思想を抱いている人がいる可能性を排除しない限り、会沢の影響と論証することは不可能であろう。元田と金子の国体観が同じであったことから、元田の憲政意見は明治憲法の制定にも影響しているという論理は飛躍しすぎである（p 453）。金子の国体観が元田の影響であったこと、さらに金子の憲法意見がその国体観に基づくものであったこと、かつ金子の元田と共通する意見が実際の憲法に反映されたことを論証しない限りそのようなことはいえない。③第三節は、元田思想における『周礼』の重要性を指摘しているが、会沢の思想との類似性を末尾で指摘してはいるものの、影響関係が指摘されているわけではなく、本博士論文全体での位置づけは不明である。第六節の検討は、井上毅の思想の検討が中心となっており、元田との類似性が指摘されてはいるが、元田論としての本章の中での位置づけはいまひとつ不明であるように思える。注 89 以降、『井上毅伝』資料編の「資料編」が抜けている。④岩倉や元田が現実の政治に及ぼしていた影響はそれほど大きくは無かったのではないか。水戸学については井上哲次郎も論じており、両者の関係を取り上げてよかつたのではないか。

終章 今後の課題の一つとして、会沢思想の大正・昭和以降の継承について、を上げているが期待したい。特に第二次大戦後、会沢思想はどのように継承されているのか知りたい。

[5] 公聴会での質疑応答

公聴会での主な質疑応答は以下の通りである。

質問：会沢正志齋に関する代表的先行研究である尾藤正英氏の論文については、もっと丁寧に紹介するべきではないか。即ち、それまでの心の自律性や人間への信頼といったものを否定し、徂徠学の制度や秩序といった視点を受け継いでいる、といった尾藤氏の指摘についての分析を加えるべきではないか。

応答：尾藤氏は『大日本史』の編纂における「志・表」の存在を取り上げ、前期では紀伝体を中心とした編纂であったのに対し、徂徠学流入以後は「志・表」の編纂へと変化したこと、そして藤田幽谷の「歴史の骨は志類にあり」という言葉を根拠としている。私見では、『大日本史』において「志・表」を加えることは、徳川光圀以来計画されていたことで、徂徠学を根拠としたとはいえないこと、また幽谷の言葉も、人物中心・道徳本位の歴史思想から全く脱却したとは考えられない。

質問：しかし、ただ、「志・表」のみを論拠として徂徠学の影響を論じるのでは弱い、もう少し、尾藤氏の議論に対抗しうる論拠を示すべきだと思う。

応答：思想の影響を考える際には、思惟方法と精神性の両面が考えられると

思うが、本論文では後者にウェイトが傾きすぎており、前者についても今後検討していきたい。

質問：会沢の膨大な儒教について論じた史料群において、「祭祀」をキーワードとして纏めたことは評価できるけれども、その上で会沢における「天」や「祭天」の問題について述べられていないと思うが、その点どうか。

応答：本論文では「郊社」と「禘嘗」といったものの分析で終わっていて、「天」そのものについては深められていない。「天」について、横井小楠は普遍的なものとしたが、元田永孚は日本独自の「天祖」と解した。会沢も「天＝天祖」といった理解に近いものと考えられる。

質問：『孝経』については、加地伸行氏の考察に依って東アジア特有の自然な「孝」の概念として述べているが、もう少し『孝経』のイデオロギー性という側面についても焦点を当ててよいのではないか。また、日本の「家」の構造と養子制度の関係についても、会沢が言及しているのではないか。

応答：『孝経』は、始めから「経」の字が付されており、ある種のイデオロギー性を持って編纂されたことは否定できない。それは親族間における自然な「孝」の理念に、「敬」の思想を付加し、「王」への忠誠を意図した側面もあるため、会沢もそのことを意識していたと考えられる。ただ、当時の時代状況や日本の文化的傾向を考えると、「民心の統合」という会沢の目的を達成するためには、それを満たしうるものであったと考える。養子制度については、会沢も言及していた箇所があったと思うが、それについては否定的見解であり、それは元田永孚や井上毅も同様の意見だった。

質問：序章だが、先行の各研究者の問題意識と、自身の問題意識を取り上げもっと論じるべきではないか。また近代への継続性について、なぜ岩倉具視と元田永孚なのか。穂積八束や井上哲次郎といった人物も「家族国家観」といったものを含め、影響があると思われるがどうか。加えて「祭祀」について論じているが、近代において「祭祀」の存在はそれほどではないのではないか。

応答：序章では、水戸学や会沢について言及された先行研究を纏めただけで、問題意識の議論まで深めていない。岩倉と元田については、生きた時代が会沢と重なっていたことと、その影響を論じるに足る史料的な根拠が、比較的多いということで選択した。穂積と井上については、今後の研究課題としたい。「祭祀」についても、近代においては皇室祭祀や、国家神道といった形ではあったが、これについての論考も不十分だった。

質問：第五章で、会沢は国学者と儒学者との協力関係、つまりは知識階級における統合を意図したという推論で、会沢の史料からもそれは読み取れると思うがそこでこれ以外に、傍証できるようなものはあるのか。

応答：本論文では、会沢の史料のみを用いて論証しており、傍証となるもの

は挙げられていない。同様の意図は、会沢の思想的影響を受けたと思われる長谷川昭道の著作にも記されているため、触れるべきだった。また一部だが、近年刊行された会沢の書簡集でも読み取れる箇所がある。

質問：近代への継続性を主張するのであれば、会沢に直接関わらない箇所についてもう少し論拠を示すべきではないか。

応答：元田以降の人物、大正時代の人物についても今後の研究課題としたい。

質問：会沢の学問において「憲政」や「法」、「経済」といった分野が乏しいため、明治以後では現実問題に対応する思想を提供できなかったのではないか。その半面で、近代の憲政等に否定的な人には受け入れられたという側面があるのではないか。

応答：近代国家に不可欠とされる思想についての著作は乏しく、断片的に言及している程度である。ただ、本論文で触れた教育関連以外の『周礼』の分析で、それらの分野を補えればと考えている。

[6] 全体の評価

本論文は、会沢に関する数多くの先行研究で、十分究明されてこなかった問題や、疑問と思われる議論を、執筆者独自の視点から、解明・再検討を試みたものである。前者の問題の一つは会沢の思想の源泉に関わるもので、本論文は大田錦城の考証学に注目し、会沢の思想形成において、師の藤田幽谷と交流のあった大田錦城が幽谷を通して会沢に影響を与えたことを明らかにしている。これはこれまで誰も試みなかったもので本書の最も大きな成果といえる。後者の疑問とされる議論は、会沢の思想が明治以降継承されなかったというもので、本論文は岩倉具視や元田永孚を取り上げ、彼らの議論が会沢の思想と類似していることを示し反証している。そしてこれらの研究過程で、長谷川昭道なる人物を発掘、長谷川が岩倉具視だけではなく大田錦城とも、従って会沢とも関係のあることも明らかにしている。これもこれまで全く扱われることのなかったもので、本書の貢献だといえる。またそうした研究の中から、多くの実りのある議論がなされている。例えば、会沢の対外観に影響を与えた木村謙次が大田とも交流があったということ、会沢の儒教經典の注釈に大田の影響があったこと、また『周礼』については会沢だけでなく、大田や藤田東湖、元田なども論じているということなどで、これらの議論も評価してよいであろう。

しかし、本論文に不十分なところがあることも確かである。例えば、「天」や「孝」といった儒教の重要な概念や儒教經典についての理解が曖昧なことである。これは、非常に長い歴史を持ち、その間に様々な解釈を生み出してきた儒教においては、止むを得ないことだともいえるが、それだけにもっと慎重に議論してほしかった。また、ある議論と他の議論を比較する場合、両者の議論

の前提にある共通なものがないと説得的な比較はできないと思われるが、本論文では例えば、会沢の『読直毘霊』を論じる際、そうした手続きが取られていない。即ち、本居宣長の国学は『古事記』を基礎とし、『日本書紀』は重視していないのに対して、水戸学では『日本書紀』が絶対視されてきたので、そうした点を先ず議論し、それから会沢の『読直毘霊』を扱うべきだったのではないか。もっとも、p268 に、別の文脈の中ではあるが、「会沢と『日本書紀』についての論考も本来であれば必要であろうが」とは書かれている。更に本論文には、思想の類似性のみを指摘し、影響関係の論証を十分していないことによる推論的結論が多々見られる。例えば、『周礼』を重視した元田の思想と会沢の思想との類似性を指摘するが、しかしそれは両者の影響関係を示すものではない。

最後に注文ではあるが、先行研究の引用や、史料の引用で少し長い箇所はコンパクトに纏めた方がよい、また史料を数多く引用しているけれども、可能な箇所は、史料をそのまま提示するのではなく、自分の言葉で要約した方が読者に親切である。

しかし本論文は、A4版で500頁を超える大冊で、しかも数多くの先行研究の不備や未解決の問題を独自の視点から解明・再検討していて、今後の会沢研究に新しい地平を切り拓くものと期待される。それ故、本論文が「博士（社会科学）早稲田大学」の学位に値するものとして、ここに推薦する次第です。

審査委員

主任審査員	早稲田大学社会科学総合学院教授	経済学博士 早稲田大学	古賀 勝次郎
審査員	早稲田大学社会科学総合学院教授	博士（文学）東京大学	劉 傑
審査員	早稲田大学社会科学総合学院教授	博士（文学）早稲田大学	笹原 宏之
審査員	早稲田大学文学学院教授	博士（文学）早稲田大学	真辺 将之
審査員	東海大学文学部教授		田尻 祐一郎